

幼児教育と小学校教育との円滑な接続のために

～「カリキュラムを」「保育と授業を」「一人一人を」つなげることから～



小学校1年生は「ゼロからのスタートではありません」

- ・時間で区切られた授業
- ・国語 算数などの教科学習

小学校

子どもたちの笑顔をつくるために大切なことは何ですか？

つまづく

つきあたる

できるのに

つまらない

段差をどのように小さくしていきますか？

どのように子どもの発達や学びをつなげていきますか？

小学校

- ・最年少の1年生
- ・できないことが前提だと・・・

上れない段差

幼稚園等

- ・時間の区切りが緩やかな生活
- ・遊びの中での学び
- ・最年長のしっかり者
- ・自分でやろうとする意欲

入学

下りたくない段差

子どもは、幼稚園等から小学校へ移行していく中で、突然違った存在になるわけではありません。発達や学びは連続しているので、幼稚園等から小学校への移行を円滑にしていくことが大切です。子どもの発達や学びの連続性を確保することを目指して、接続期に大切にしたいことを三つの‘つなぐ’からまとめました。



カリキュラムをつなぐ

幼児教育センター主催の研修会で、幼小の子どもの学びや育ちをつなぐ「ジョイントカリキュラム」を作成しました。また、「ジョイントカリキュラム」をもとに、それぞれのカリキュラムを見直しました。

「ジョイントカリキュラム」を作成して感じたこと



就学に向けて、園で育てたいことが具体的に見えてきました。

スタートカリキュラムに子どもの姿や具体的なねらいを入れることで、もっと指導に生かせるのではないかと考えました。



ジョイントカリキュラム

接続期のカリキュラムを見直すに当たって大切にしたこと

- A** 幼小で項目をそろえてみよう！
子どもの発達が明確になり、発達に応じた指導ができるようになります。
- B** 子どもの実態を捉えよう！
特に入学当初は、一人一人が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうために、児童の実態に応じることが大切です。
- C** 幼児期の学びを保障する活動を具体的に考えよう！
幼児期に育みたい資質・能力が確実に育めるような活動内容を具体的に考えることで、教職員の意識の共有化が図れます。
- D** 幼小接続を意識した取組を示そう！
豊かな接続期の生活を目指して、幼小それぞれが充実した活動を展開することができます。

年長後半のカリキュラム

興味 “やってみよう！”	12月	1月	2月	3月	自信 “みんなでできた！”
A 子どもの姿	健康に過ごすために手洗いや歯磨きなど、自分から進んで取り組む姿が見られる。	友だちと遊ぶ目的を共有し、道徳意識が芽生え、遊びを盛り上げていく姿が見られる。	共同の道具や自分の持ち物を大切にすることが身に付く。	遊びの発達し方がよくなり、たり、必要なものを保育士に伝えたり、必要なものを自分で取り出す姿が見られる。	共通の目的に向かい、友だちと協力し、物や文字・歌などを、遊びや生活に活かす姿が見られる。
わら	クリスマス発表会	ごっこ遊び(お店やさんごっこ、おままごと)	運動遊び(なわとび、ボールつき)	基本的生活習慣(手洗いや歯磨き)	相手の思いに気づけるように、ご自分の思いや話したことを伝えたい方法を知らせる。
子どもたちが	【取組】 入学先小学校で1年生と交流する	【情報交換・相互理解】 異なる年、児童を必要とする手についての様子や支援・自立の方法について知らせる。	【情報交換・相互理解】 異なる年、児童を必要とする手についての様子や支援・自立の方法について知らせる。	【情報交換・相互理解】 異なる年、児童を必要とする手についての様子や支援・自立の方法について知らせる。	【情報交換・相互理解】 異なる年、児童を必要とする手についての様子や支援・自立の方法について知らせる。

スタートカリキュラム

4月	5月
A 子どもの姿	B 自信 “みんなでできた！”
新しい友達 “みんなであそぼう”	友達に伝えたい “みんなであそぼう”
安心 “みんなであそぼう”	成長 “みんなであそぼう”
ともだちがいっぱいいるよ	はな
入学当初、生活科を中心とした総合的な活動の中で安心して自分の気持ちを表現できる態度を育てる。	日々の生活や活動を通して、言葉と表現の楽しさを味わえるよう
【入学期】 生活科を中心とした総合的な活動の中で安心して自分の気持ちを表現できる態度を育てる。	【入学】 入学式や入学準備の準備が整った状態で入学する。
【入学期】 生活科を中心とした総合的な活動の中で安心して自分の気持ちを表現できる態度を育てる。	【入学】 入学式や入学準備の準備が整った状態で入学する。
【入学期】 生活科を中心とした総合的な活動の中で安心して自分の気持ちを表現できる態度を育てる。	【入学】 入学式や入学準備の準備が整った状態で入学する。

遊びを中心に総合的に学ぶ幼児教育と、各教科等を中心に系統的に学ぶ小学校教育には、カリキュラムの構成原理に大きな違いがあります。

幼小の教職員が、合同の研究の機会などを通して、それぞれのカリキュラムを見直すことは、接続期に大切にしたい具体的な子どもの姿や教職員の援助を共有することにつながります。

保育と授業をつなぐ

ある日の保育から、幼稚園等で育まれている資質・能力を捉え、小学校の授業の中で生かされている場面の例をとりあげ、まとめました。

ある日の保育から

<日案の一部を抜粋>

ねらい：友達と協力したり工夫したりして遊ぶことを楽しむ。
主な活動：ドッジボール

時間	幼児の活動	予想される子どもの姿	指導上の留意点
8:00~	順次登園 戸外遊び	・友達を誘い、チーム決めなどを積極的に行う子、ボールの数を増やしたいと言う子がいる。	・勝ち負けにこだわることで起きたトラブルは、皆でルールの確認をしたり、考えたりできるようにする。その他のトラブルは、できるだけ見守り、子どもの考えを認めた援助を行う。
10:30~	朝の活動 ドッジボール	・勝ち負けにこだわりすぎてトラブルになる子がいる。 ・勝敗を意識する子が増えてくる。 ・作戦を考えチームに伝える子がいる。	・自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりしながら遊びを進め、仲間意識を深めていけるように配慮し、子どもたちが主体となって遊ぶことができるように見守りアドバイスをする。
12:00~	昼食		

<育まれている資質・能力>

- ・目的に向かって見通しをもち、自信をもって行動する。
- ・思いを伝えたり、相手の思いに気付いたりして遊ぶ。
- ・友達とのつながりの中で、一緒に活動することを楽しむ。

生かして!

ある日の授業から

<指導案の一部を抜粋>

(2時間扱い)

(準備物) 単元全体の学習計画 前時までの掲示物 作業用紙

- 本時の学習を確認する。
かぶがぬけたときのようすやきもちをかんがえ、くふうしておんどく
- かぶが抜けたときの気持ちや会話を想像する。
○ねずみがやってきたときどんな話をしたでしょう。
・こんどこそかぶをぬくぞ。
・ちいさいけどだじょうぶかな。
○やっとかぶがぬけたときどんな話をしたでしょう。
・ねずみさんのおかげだね。
・みんなでちからをあわせたからだね。
・あきらめないでがんばったからだね。
- グループで協力し、工夫して音読の練習をする。
・せりふをつけたして、きもちをこめたいな。
・ともだちのおんどくのしかたは、くふうしてるな。
・もつとちがういいかたもあるよ。
- グループごとに音読を発表し、感想を伝え合う。
・ともだちに、はくしゅをもらったよ。
・ともだちのはんは、じぶんたちとはちがうくふうがあったよ。
・みんなでやると、たのしいな。

単元全体の学習計画を子どもと共有したり、これまでの学習内容が分かる掲示物等の学習環境を準備したりしています。

自分の考えを作業用紙に表現してから、伝え合う活動に取り組んでいます。

一人一人の考えが出し合えるよう、ペアやグループなどの学習形態を取り入れています。

ペア→全体

個→全体
(作業用紙)

グループ→全体

ねらいが明確で、子どもが学習に見通しをもてることは、やっぱり大切なことなのね。

肯定的に子どもの思いを受け止めています。

子どもが安心して自分の思いを表現できるようにしたいなあ。



小学校教員

今日やることが分かったから、やる気が出たよ!



安心して友達に伝えられるから、話し合いが楽しいよ。

こっちにパスして!!

一緒にやろうよ!

勝つための作戦があるんだ!

当たったら外だよ!

遊びを通した学びが確かなものになるよう、保育を工夫します。

日々の記録の分析から、育まれている資質・能力を見取り、伝えていかなくは。



保育者

幼稚園等では、「育みたい資質・能力」が確実に育つよう、保育を工夫することが必要です。また、日々の記録の分析から育まれている資質・能力を見取り、小学校へ伝えていくことが大切です。

一方、小学校では、幼児期において育まれた資質・能力を踏まえながら、指導の方法を工夫することで、子どもの意欲や自信をつないでいくことが大切です。

一人一人をつなぐ

指導要録や保育要録の記述内容から、一人一人の発達に応じた指導が引き継がれた事例をまとめました。

幼稚園等での姿（伝えたいこと）



納得するまでやり続けるAさん



周囲を気にせず、自分が納得するまで整理整頓や製作を続けることが多い。

丁寧にやりたいという気持ちは受け止め「ここまでやったらね」と見通しがもてる言葉かけをしたり、終了の合図を一緒に決めたりするように援助することで、決められた時間の中で自分自身で折り合いがつけられるようになりつつある。

自分の思いどおりに行動するBさん



運動能力が高く、競い合う遊びを好む。自分の思いが強く、思いどおりにならないと友達に対して怒りを表すことがあった。

保育者がその都度受け止め、言葉で代弁し、心の安定を図った。感情を少し抑えられるようになってきたが、引き続き配慮が必要である。

できないことを気にするCさん



友達が絵本を読む姿を見て、「文字が読めない」と気にしている。

毎日のように虫探しをして遊ぶ時に「すごいね。虫博士だね」と言葉かけをし、見守ると、図鑑を持ち出し「先生、何て読むの?」と聞いてきた。文字に対して知りたいという気持ちが芽生えてきている。

小学校での姿（具体的な配慮）



算数セットのおはじきの片付けなど、丁寧さへのこだわりが見られるため、活動に遅れてしまう。

- ・こだわっているところを受け止めた。
- ・友達と一緒にのペースで活動できる係活動を大切に。

自分のペースではあるが、友達の様子を気かけながらはりきって活動に取り組んでいる。

体育のドッジボールで負けると怒り出すなど、自分の思いどおりにならないと乱暴な行動をしてしまう。

- ・強い思いをもっていることを肯定的に捉え、言葉かけを工夫した。
- ・体育ではお手本としてみんなの前で褒め、自尊感情を高めるようにした。

大縄跳びの練習など、リーダーシップを発揮し、学級をまとめてくれるようになってきた。

勉強に対する苦手意識があり、登校を渋る様子が見られた。

- ・幼児期に好きだったことから話題を広げて話したり遊んだりした。
- ・生活科の時間に生き物について知っていることを発表する場を設けた。

「休んでいる友達に手紙を書きたい！ひらがな教えて」と学習に対して意欲的に取り組めるようになった。

日々の生活の中で伸びつつある力を捉え、大切にしてきた関わり方を伝えることが、子どもの安心感につながりますね。

保育者

一人一人の安心感につながる情報を共有することで、今伸びつつあるところを知り、発達に応じた指導をつなぐことができるのですね。

小学校教員

子どもの発達する姿は、一人一人固有のものであり、どの時期にどの側面が伸びるかは、子どものもつ特性や生活経験によって異なります。

指導要録や保育要録の抄本又は写しの送付や、就学に当たっての情報交換などによって、一人一人のよさやできること、子どもへの関わり方をつなぎ、小学校での学習や生活に生かしていくことは、子どもが主体的に自己を発揮しながら安心して学びに向かうことができるようになるために大切です。

幼児教育と小学校教育との円滑な接続のために

栃木県幼児教育センター顧問
(國學院大學人間開発学部教授)

神長 美津子



「円滑な接続」が求められる背景

幼稚園教育要領等の改訂では、幼児教育で育みたい資質・能力として「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱を明確化し、幼稚園教育要領等に示す5領域（「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」）を踏まえた遊びを通しての総合的な指導により、この三つの柱を一体的に育むことを確認しています。その上で、18歳を見通して幼児期の終わりまでに育ててほしい姿として、「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」（以下、「10の姿」として表記）を示し、幼児期の終わりの育ちの姿を小学校教員に伝えることで、小学校の入門期の指導の工夫・改善につなげるようにしています。

今回の学習指導要領等の改訂では、幼児教育から高等学校教育を見通して、子どもたちの「生きる力」となる資質・能力をじっくりと育てていくことを目指しています。そのためには、学校段階等間の「円滑な接続」が不可欠であり、幼小の連携はその第一段階なのです。

学びの成果を共有する

幼児教育は、子どもたちの遊びや生活を基にする経験カリキュラムであり、小学校教育は教科等の学習を中心とする教科カリキュラムです。このため、幼児期の教育から小学校教育に移行する際、教育課程の構成原理や指導計画の考え方が異なるため、その指導には「段差」が生じていて、これまで幼児教育から小学校教育を見通すことができない、あるいはその成果が小学校教育に十分に伝わっていないという指摘がありました。

確かに、幼児教育と、小学校以降の教育では、その指導や評価の考え方は異なりますが、育みたい資質・能力は共通であり、特に幼児期から小学校低学年にかけては、義務教育及びその後の教育の基盤となる「学びの基礎力」をつけていく時期なので、子どもたちの育ちの姿、あるいは学びの姿を共有し、指導を工夫していくことは重要です。

そのためには、まず各園で「10の姿」のそれぞれについて、「我が園では、特に5歳児後半にどのような子どもの姿が見られるか」を確認することです。たとえば、「健康な心と体」については、幼稚園教育要領では「幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。」（下線は筆者が引く）と示されています。

特に「見通しをもって行動する」は、5歳児の終わりの姿を意識した表現ではないでしょうか。これは、言い換えれば、5歳児後半になると、「健康や安全」に関わっては、「見通しをもって行動することができるようになる」ことを意味しています。

このことについて、ある幼稚園では、5歳児がドッジボールのコートを自分たちで描いている姿をあげていました。子どもたちにコートラインを描くことを任せると、片方のチームのコートが小さくなってしまったそうです。すると、一人の子どもが「これじゃ小さい。小さいとごちゃごちゃしてぶつかって危ないよ」と言ってきました。保育者は、安全に関わる大事な気付きなので、「そうだね。逃げるところが狭過ぎるとぶつかっちゃうね。よく気が付いたね」と受け止め、その気付きをみんなに知らせたそうです。子どもは感覚的に捉えていますが、5歳児なりに安全に配慮して楽しく遊ぶための適度な広さに気付いています。

育ちの背景にある環境の構成や教師の関わり

育ちの姿を小学校教員に伝える際に留意することは、どのような環境の下でこのような子どもの育ちの姿が見られたかという、育ちの背景にある環境や教師の関わりです。また、小学校ではどのような指導が必要だろうか予測してみることも大切です。その際、園環境と小学校の環境、教師と保育者の関わりの違いは、理解しておかねばなりません。

おそらく、接続期の5歳児は、いろいろな遊びの経験を積んできたので、園環境であれば、ある程度の危険の予測はできるようになっています。特に、ドッジボールは、徐々に人数が増えてきて、継続して遊んでいるので、ボールから逃げようとして、仲間同士でぶつかってしまった苦い体験もあるので、子どもたちは体験を通して、楽しく遊べる適度な広さを知っているのです。

言い換えれば、園外の環境では、必ずしも同じような危険への予測はできないかもしれませんが、園生活では、遊びの多様な体験を通して危険を予測することはできてきています。小学校でも安全と結び付けて、教師の側から「こんな遊び方はどうかな」と投げかければ、子どもたちは安全を意識した行動はできると思います。それは、もちろん、ドッジボールのコートだけを言っているわけではありません。むしろ、資質・能力を育てていくということは、活動している姿から子どもの中で育ってきていることを捉え、必要な援助をしていくことです。今後、各学校園において、「10の姿」を中心にして、子どもの育ちを捉え、幼児教育と小学校教育の関係者が指導を共有していくことこそが重要なのです。

今後、各学校と各園で子どもたちの育ちや指導について、活発に話し合われることを期待しています。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

平成29年3月に告示された「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」「保育所保育指針」や「小学校学習指導要領」において、幼児教育と小学校教育の接続のキーワードとして「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（10項目）が示されました。

幼児教育と小学校教育の円滑な接続を図るために、この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を幼稚園・こども園・保育所と小学校等で共有し、連携を図ることが求められています。

●健康な心と体

幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。

●協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

●社会生活との関わり

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。

●自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。

●言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

●自立心

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

●道徳性・規範意識の芽生え

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。

●思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

●数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

●豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿は…

☆到達すべき目標ではありません。

☆すべての幼児に一樣に育つものではありません。

☆それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねていくことで、見られるようになる姿です。

☆一つずつ取り出して指導、評価するものではありません。

☆5歳児終了の姿は、1年生始まりの姿です。

平成30（2018）年度幼児教育調査研究委員会

【 委 員 】

黒川 泉	宇都宮市立御幸が原小学校
町井 瑞枝	芳賀町立芳賀南小学校
塩澤 恵美	塩谷町立玉生小学校
岸根 知子	岡本幼稚園
鈴木 めぐみ	塩谷町立認定しおやこども園
七井 恭子	みずはし保育園

【 事務局 】

栃木県教育委員会事務局学校教育課
栃木県総合教育センター幼児教育部
(所属等は平成31年3月現在のものです)

※リーフレットは、栃木県幼児教育センターのWebサイトよりダウンロードできます。